

討 論 と 展 望

カウンセリング過程の内容分析では第4群(330)のスナイダーのカテゴリーの実証的研究と第3群および第5群の現象学的方法とに分類ができる。こういう内容分析的研究が要請される理由としては、これまでの心理療法またはカウンセリングに関する研究がその治療という実践活動についてクライアントのパーソナリティのある側面になんらかの転換をもたらしたかどうかという、いわゆる治療の効果に関して行なわれて来たといつてよいであろう。その研究の結果は効果のあるものもあるが、そうでないものもある。その理由は治療法の相違やクライアントのタイプの差によるらしいとされ、それ以上の検討はなされていない。そこで、心理療法またはカウンセリングの実践活動の中で実際にいかなる過程が生起しているのか。なんらかの治療効果があるというなら、いかなる過程の生起が関係して来るのか、また失敗した場合はどうなのかといったようなカウンセリング過程の内容に入りこんだ所に問題の視点を向け、吟味検討されなくてはならないという要請が生まれてくるのである。わが国においてこういった情勢が出て来たのは、ここ2年ばかりのことで内容分析的研究はこれから始めようとする最も重要な新しい領域である。この研究の始めは研究者自身の扱ったケースについて事例研究的にアプローチし段々とケースを増して行く方向をとっている。その内容分析に用いたカテゴリーシステムはスナイダーカテゴリーである。これらには、佐治：非指示療法による面接記録(精神衛生研究, 1957, 第5号) 船岡・他：ケース・スタディによる母親のカウンセリング(京都市教育研究

所第2, 第3報告, 1960, 1961) 阿部：精神療法の過程の分析(奈良医学雑誌, 1960; 教心, 1960)等がある。

内容分析的研究はセラピストとクライアントの相互関係をふまえて研究されなくてはならぬことは既に述べたごとくでスナイダーのカテゴリーはセラピストの非指示的一指示的という態度特性の検出であり、またシーマンの尺度を援用したクライアントの洞察の量の検出というように両者を別々に捉えていることにこのシステムには限界があるといえよう。

一方、クライアントの動きを現象学的水準で把握しようとするロジャーズのプロセスの適用研究がある。高柳：ロジャーズ・プロセススケール(日心, 1960), 村山：心理療法に関する研究—ロジャーズのプロセススケール(教心, 1960; 第23回臨床心理学会)等がそれである。さらには、上述カテゴリーやフロイディアン学習理論による把握とは別の新しい現象学的視点に立つ研究が山本・他(326)によつて試みられた。以上、本部門に発表された研究は、セラピスト—クライアント関係をいかに捉えるかについて実証的に、また現象学的に追求したものである。この問題点を追求して行くためにはリサーチとともに心理療法またはカウンセリングの実践活動も同時に、さらに高め、深められて行かなくてはならないことはいうをまたない。

この稿については水山進吾(記録)坪上宏(MMP I) 山本和郎(過程内容の分析)の諸氏の御援助に深謝いたします。

7. 人 格 1

加 藤 正 英

質疑応答の概要

人格1の部会における報告はこれらを次の3つに分けて討論した。その1は201~204で自己概念を主とした人格構造についての問題、その2は205~207で人格構造の成立に対する発達の社会的問題、その3は208~210を人格構造に関するその他の問題としてまとめた(202山根は討論に欠席)。

まず、201 駒崎から補足があり、同じ高次欲求でも社会的承認の欲求に発達の差異が顕著に見られ、独立への欲求が最も主要な発達の指標となること、愛情の欲求では友人への愛情が強まってくるのが特徴である。なお全般的に最も高いのは自由に行動したい欲求であること

が述べられた。

さらに武上(愛知学大)からの欲求の高次低次の規準についての質問に対しマスローやリンゼイに従つて4つの高次欲求を定めたが、この4つは同時に神経症発生の原因とも関連があるといわれているので重要視してとりあげたという回答がされた。

次に自己概念の問題として203 古沢, 204 津留の報告が熱心な討論の対象となつた。

古沢は自己概念を、Ⅰ自己の資質能力に対する認識項目12, Ⅱ対人関係でうける緊張に対する認識項目12, Ⅲ自己の適応体制に対する洞察項目10, Ⅳ自己に対する感情, 評価項目12, 合計46の項目に対して現実的自己, 理想的自己, 社会的自己の3つの見地から質問紙法によつ

て7段階プロフィールをとり、それぞれの項目における現実的自己と理想的自己、現実的自己と社会的自己とのずれを問題とし、前者のずれを内的葛藤得点、後者のずれを社会的葛藤得点として、両者の相関およびYG性格検査の結果との関係を見た。

204 津留はレヴィンおよびスタグナーの人格理論から人格領域を4つに分け、大学生に、A. 自己評価を1週間おいて2回、B. 自己評価と他人に映じた自己としての評価とを行なわせ、C. 高校教師にはじめは自己評価、次には生徒に映じた自己を評価させたが、各ずれの差は $A < B < C$ となつたことを報告し、その補足として、自分は人格には無意識的なものも含まれると思うが、それを意識的にセルフ・パーセプトという形でとらえられるかどうかは多少疑問に思っている。精神病患者(27名、主に分裂病者)にも行なつたところ、第1領域(知覚—運動領域)ではずれが少なく、その他の領域ではずれが高いことが見られた。このことから、ずれの高いのは精神的崩壊を示すように考えられる。また青年期の自我動揺性とこのずれとの関係を考えることは将来の問題として興味があるとのべた。

それに対し、木村禎司(日大)から精神病患者に対する調査の仕方についての質問があり、また精神の動揺に関連して4才および中学2年にそれが見られるという他の発表(駒崎、斎藤)とあわせて反抗期の問題と関連はないかとの質問があり、それぞれ関連があると思われるむね答えられた。

松本(東北大): 以上201~204の発表を総括して、自己認識や自己概念の研究の場合、こういう質問形式のせまり方はつねにその背後に人間関係の考えが入つて来る。向性検査の昔からいわれたのと同じように、一義的に答えがたいこと、考えれば考えるほどわからなくなることなどの難点がある。問題は常に、だれに対して、何に対してという内容的関係が一番重点を占めて来るのではないか。ここでは非常に普遍的に取り扱われているが、もつと、だれと、何をという相互関係が明確化されるならば、もつと別のアプローチの仕方もあるのではないかと思われる。

津留: 自分の場合は人間関係はわざと除こうとしたがやはりB、Cの場合は入つて来る。テスト状況としては除けても、自己概念そのものの中に対人的な比較が入つて来る。問が一義的にならないようにという点では、答に「わからない」という欄を入れた。

大崎(熊本大): 古沢は内的葛藤、社会的葛藤とはつきり分けているが、調査項目それぞれについて理想的自己のうちには社会的自己が含まれて来ると思われるので、

両者のずれを、現象的な行動とその内省的なものとで比較するか、その問題自身で比較するかという点で考える余地がある。

古沢: それについては自分としても問題はあると思うが、操作的に定義づけたものとして考えられたい。

大平(金沢大): 現実的自己と理想的自己、現実的自己と社会的自己の間のずれを、ただちに葛藤と解釈するのは概念的に問題がある。

古沢: たしかに問題はあるが、比較的是つきりした現実的自己に対しては他の自己がそれと異なるときに心理的に葛藤と見られるものがあり、ずれと葛藤とが重なることがある。こういうことの中には心理的なものもつれがある。

津留: 自分の研究の場合、自己評価をするときに自己防衛的構えをとる人があるが、そんな人にはほんとうの意識で葛藤になつていない場合があり、ずれは必ずしも葛藤にはならない。

武上: ずれはない方が望ましいと考えられるが、自己認識が反省とか動機づけとかになつて人格改造、発展、向上と関係して来る。そのような適応についてはどう思うか。

古沢: 自分の調査では、ずれの少ない人が性格的には(YG検査で)積極性であつた。

返田: 自分の研究では一般的にいつて、ずれの少ない人は自己肯定的、社会的適応に価値を抱く人が多く、ずれの大きい人は内省的自己反省の傾向を示した。

斎藤: 自分はこのような調査をしたときに、理想的自己とは、自分はそうありたい、しかも実現可能性のあるものという教示をした。

司会者: 自己概念に関する調査では、松本の発言のように、その求める内容を限定してかからねばならないと思う。その点職業指導等においては、適性とか希望職業という対象が比較的是つきりしている。今夏、D. E. スーパーが来日したが、同氏も現在の職業指導の主要課題として自己概念をとりあげているので、本日の討議は大変興味があつた。海外においてもこの数年前から自己概念に関する研究が沢山出て来ている。なお、自己概念に関する調査方法として最近 Q-sort が用いられるようになったが、適切な方法だと思う。

205~207について、橘(阪大): 207 岩城の発表について、いま団地の問題は阪大でも、阪大、関学大、府教育研究所等が一体となつて調査にかかっているのも、お互いに協力したい。

松本(東北大): この研究で観察法をとりあげたのはよい。われわれの研究がとかく学生などの資料のとりやす

討 論 と 展 望

い対象に限られがちなのに対してこれは現在の社会の微妙な問題をとりあげている点で興味がある。殊に子どもを持つ母親と子どもを持たない母親とで予想に反した答えの出たのは興味がある。

岩城：答えがよい態度で得られるよう苦心した。子どものある家庭と子どものない家庭とでは判断の規準がちがう。子どものない家庭は理想的で、子どもをもつた家庭では人間関係の面が重視され、より現実的である。

山下(都立大)：206 斎藤、207 岩城の両方に関係があるが、過保護であれば子どもの経験が不足し、発達が遅れるだろうという予想で問題をとらえたと思うが、社会的成熟を測定するための重点をどこにおくかが問題である。岩城の場合にも団地の子どもの社会的成熟が遅れるというのは、われわれの常識に反する。この場合、牛島式の社会的成熟度検査を使うのは、その検査の構成から見て合わないのではないか。岩城は環境性で説明しようとしたが、その環境性の分析こそ大切である。

守屋(立命大)：団地の問題については関西保育問題研究会でもやっているのだから、その方でも協力したい。一口に団地といっても、種々の階層があるので広い範囲を考える必要がある。斎藤の場合でもやはり階層が問題となる。団地の場合には子どもだけの問題でなしに、そこに住む人たちのつながりとかものの考え方とか社会性の背景が重要である。調査方法に面接観察を用いたのはよいが、社会的成熟度検査については山下と同意見である。

208～210について、木村：理想とか現実とか自己とか社会とかずれ、葛藤というようなことが問題となつていますが、そのような点について恩田の意見はどうか。

恩田：心理的自由を得るためには、心の中に葛藤がある場合、それを避けることなく、それを受入れることが大切と思う。禅では自然と自分がひとつになつてしまう。対人関係でもひとつの魂のふれあいということが大切でそういうひとつの状態が自由である。

佐藤(京大)：禅の方では真実の自己にめざめるという言い方をしますが、self-actualizationと真実の自己についてどう考えるか。

恩田：臨済禅では自己にめざめるという言い方をし、曹洞禅では、むしろ体験していくことをいう。いまここで最も適切な行動がとれるということがざとである。したがって認識面でいくか、行動面でいくかという見方の相異だけと思う。

質問者不詳：自由行動との関係から 201 の駒崎に、フロイド流に考えると、自我、超自我が強くなると望ましい健康な自己になると考えられる。それとイ德的な欲求をもつ青年の人格の発達とはどう考えるか。

駒崎：青年は自由を求めている。しかしそれがどの程度イ德的なものかはわからない。不適応群の方が自由行動に対する要求が強い。

平沼(応用教育研)から返田の報告の中の表に対する質問があつた。

関係領域の最近の研究の展望

人格に関する問題は現在では非常に広い領域にわたっているのだから、ここでは主に自己概念を中心として、ここ 2、3 年間の研究を展望することとする。

人間の行動に関する研究の方向が、自我(ego)や自己(self)という主体側に移つて来て「心理学はひとたび失える自我をしだいに取りもどす傾向を示した」ことは今田(現代心理学に於ける自我の問題、心理、1948、第3号)の早くから指摘したところであり、「人格心理学はまさにその一般的傾向の一つの現われである。」(今田恵、人格の問題、「現代心理学の展望」第19回日本心理学会、1955)とした。

北村もまた早くから自我の問題をとらえてその分析にかかっている。(基本的な自我についての一考察、心研 1953、24—2)。その後、自己概念、自己知覚、自己態度等の自己を主題とする研究が次第に現われたが、それらの 1958 年までの内外の研究についてのだいたいのまとめは星野が行なっている(自己態度の研究をめぐり、三の問題、輿論科学協会紀要、1958、No. 23)。したがってここでは 1958 年以後のものについて見ることにする。ただし、自己概念についての主要な問題は、前掲の討議の中にほとんど出つくしているのだから、紙面の都合もあり、大部分文献を列記するにとどめる。

1. 日本心理学会大会報告

第23回(1959) 木村禎司：理想像の因子分析、(これは Q-sorts を用いることについて、わが国では先駆的と思われる)

林正邦・中原弘之：パースナリティ・インベントリーにおける理想水準の自己診断応答におよぼす影響(Manifest Anxiety Scale を用いた side by side 法によるもの)

花沢成一：青年期における理想的自我像。

伊藤祐時：職業的自己理解の発達の研究。

後藤豊治：適性意識の発達について。

(以上 2 研究は職業に関する自己概念)

第24回(1960) 北村晴朗：現在の自己を対象とする自己視の表象。(周辺の自己像の把握について見たもの)

戸荻正人：自己概念と自己受容。

川中 勝：自我についての研究(1)。

教育心理学年報第1集

加藤隆勝・返田健：青年の自己像，理想的自己像および異性像に関する研究。

第25回（1961）川中 勝：自己概念の因子構造と発達的研究（第3報）。

大沢 博：自己意識に関する一研究。

乾 孝：社会環境と自己認知。

伊藤祐時：職業的自己理解診断検査法の因子分析について。

2. 日本応用心理学会大会報告

第26回（1959）花沢成一：青年期における理想的自我像(1) ——主題記述法による一考察——

第27回（1960）徳田安俊：自己概念の発達的研究。

北村晴朗・菊地哲彦・針生享・大山正博：自己の過去，現在，未来に対する評価に及ぼす Ravonal 静注の効果。

木村禎司：自我像に関する研究(2)。

伊藤祐時：職業的自己理解の発達的研究（第3報）。

3. 日本教育心理学会総会報告

第2回（1960）山根薫：高校生のもつ理想の人間像(2)

4. 学界誌関係

斎藤久美子：自己意識の分析による人格適応性の一研究。心研，1959，30—4。

加藤隆勝：自己意識の分析による適応の研究。心研，1960，31—1（内外研究展望）。

福島正治・村山 登：自己概念の発達的研究。教心

研，1958，8—1。

加藤隆勝・返田健：青年の自己像，理想的自己像および理想的異性像に関する一考察。教心研，1961，9—1。

佐治守夫：Qテクニック—Personality 測定についての考え方。心評，1958，2—2。

自己概念に関する研究の検索は一応以上で終わるが，その他になおもれたものがあるかもしれないことを許されたい。

なお，海外においても Annual Review によれば1957年ごろより見られ，今夏 Super による職業指導セミナーにおいては，1959—61年の間に10以上の研究のあることが示された。

団地に関する研究はまだ見あたらない。

なお，恩田の発表に関連して禅の心理学的研究を以上の学会および学界誌中に求めると，

佐藤幸治：禅と心理学。心研，1959，30—4。

安宅孝治：森田神経質説と禅。日心，1960。

神戸忠夫・佐藤幸治・名倉啓太郎：坐禅と静坐による人格鍛錬。日心，1960；禅の心理学的研究(1)疑団と見性。(2)脳波から見た坐禅の方法の比較的研究，日心，1961

K. Sato; et al. : What is the True Self. Psychologia, 1961, 4—3。

佐藤幸治：心理禅，創元社，1961。
などがあげられる。

8. 教師

中 野 佐 三

1961年における「教師」に関する心理学的ないし教育心理学的研究概要は，日本心理学会第25回大会（1961，早稲田大学）ならびに日本教育心理学会第3回総会（1961，名古屋大学）における報告によつてこれを知ることができる。

両学会を通じて，この分野における研究としてもつとも注目されるのは，名古屋大学において報告された同大学教育心理学研究室のメンバーによる共同研究「教育における指導者の行動パターン」であろう。これは日本教育心理学会の宿題研究として行なわれたもので，きわめて組織的，包括的であり，規模また大きく，それだけに多くの問題を含んでいるといえようが，これらについては本年報の別の場所に詳細であるので，ここには省略する。

I 日本心理学会大会における 報告と討論の概要

日本心理学会第25回大会で報告された「教師」に関する4つの研究の内容はその報告論文集に詳しいが*，その要点はほぼつぎのようである。

西山啓の「教師の児童生徒観に関する研究 (2)」は，MTA I (Minnesota Teacher Attitude Inventory) の日本版標準化の意図をもつて行なわれている継続研究の一部であつて，日本版の妥当性を検討するという目的から，MTA I に対する反応結果と，BPT (Bernreuter Personality Inventory) に対する反応結果とを比較検討して，MTA I 得点と教師の personality との関係を検討しようとしたものである。それに対して，(1)

* 日本心理学会第25回大会発表論文集，1961，早稲田大学，P. 260—266。